

## 第2章

# 子どもが意欲的に 取り組む授業づくり例

---

小・中学校における子どもが意欲的に取り組む授業づくりの例を紹介します。

## 子どもが意欲的に取り組む授業づくり例について

ここでは、学ぶ意欲をはぐくむための「欲求・動機」「学習行動」「認知・感情」の各プロセスにおける教師の意図的な働きかけの考え方を踏まえ、参考となる授業（単元）づくりの例を紹介します。

小学校は国語、社会、理科、音楽、中学校は数学、技術・家庭（技術分野）、外国語について取り上げています。一部の教科の事例のみ紹介していますが、その教科の他の単元（題材）や他の教科にも適用できるように配慮しました。

### 1 授業づくり例の概要

（最初に、教科名、学校種学年、働きかけを行う「学ぶ意欲の構成要素」を明示）\*

- 1 単元（題材）名
- 2 単元（題材）の目標
- 3 教材（題材）または単元
- 4 主な学習活動
- 5 学ぶ意欲の構成要素への働きかけのポイント



\*いくつかの事例では、「学ぶ意欲の構成要素」への働きかけに加えて、「学びに向かう集団づくり」へのつながりについて言及しています。集団づくりの3視点（p 3 参照）については、以下のように省略して示しています。

- ・**帰属意識**…帰属意識の高い学級
- ・**規範意識**…規範意識の高い学級
- ・**高め合える**…互いに高め合える学級

### 2 活用

各学校では、これまでも学力の三つの要素の一つである学習意欲をはぐくむ授業を行ってきました。以下に示す事例を参考にして、授業中に学ぶ意欲の構成要素への効果的な働きかけを行い、より一層、学ぶ意欲をはぐくんだり、授業に意欲的に取り組む態度を身に付けさせたりしていただきたいと思います。

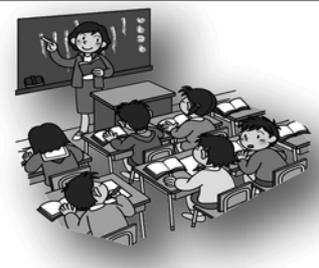
授業は、単元（題材）の目標や本時のねらいの達成を目指して展開されます。学ぶ意欲をはぐくむことを意識するあまり、授業のねらいの達成がおろそかにならないように注意することが大切です。

※ 事例の「5 学ぶ意欲の構成要素への働きかけのポイント」の中に出てくる「有能感」等の構成要素については、p 8の解説を参照してください。



授業づくり例一覧

	教科名	学年	単元（題材）名	働きかける構成要素	集団づくりの視点
小学校	国語	1年	「のりものずかん」をつくろう	有能さへの欲求 挑戦行動 有能感	
	社会	6年	戦国時代からどのようにして安定した江戸時代になったのだろうか	知的好奇心 有能さへの欲求 深い思考 協同学習	帰属意識 (帰属意識の高い学級)
	理科	5年	物の溶け方	知的好奇心 情報収集 独立達成 深い思考	
	音楽	4年	音の重なりと反復のおもしろさを感じ取ろう	知的好奇心 おもしろさ・楽しさ	高め合える (互いに高め合える学級)
中学校	数学	2年	式の計算	知的好奇心 自発学習 協同学習 深い思考 おもしろさ・楽しさ	帰属意識 (帰属意識の高い学級)
	技術・家庭 (技術分野)	1年	家族の役に立つ小物入れを考えよう (製作品の設計)	向社会的欲求 情報収集 協同学習 挑戦行動 充実感 有能感	
	外国語	3年	Let's Read 2 「Roy Brown - Boy Detective」	知的好奇心 協同学習 深い思考	高め合える (互いに高め合える学級)



1 単元名 「のりものずかん」をつくろう

2 単元の目標

- ・知識を得るために、事柄の順序を考えながら内容の大体を読み、文章の中の大事な言葉や文を書き抜くことができる。
- ・事柄の順序に沿って、簡単な構成を考え、句読点を使ってつながりのある文を書くことができる。

3 教材 じどう車くらべ（光村図書 1年）

4 主な学習活動

単元の展開（全12時間）

	学習活動	指導上の留意点
第1次 (1)	◆どんな自動車があるか話し合ったり、教師が作成した「のりものずかん」を読んだりして、単元の見通しをもつ。 <b>有能さへの欲求</b>	・興味・関心を高めるために、自動車について知っていることを自由に発言させる。
第2次 (7)	◆教材文「じどう車くらべ」を読み、6種類の自動車を説明する文章の構成に気付いたり、「しごと」と「つくり」を読み取ったりしながら、「のりものずかん」をつくる。  ・「じどう車くらべ」を読み、文章の構成について考える。  ・バスや乗用車の「しごと」と「つくり」を確かめ、ワークシートにまとめ、余白に絵を描く。  ・トラックの「しごと」と「つくり」を確かめ、ワークシートにまとめ、余白に絵を描く。  ・図鑑のトラックの「しごと」を見つけ、ワークシートにまとめる。  ※クレーンとはしご車についても、トラックと同様の活動を行う。	・目的意識をもって教科書教材を読み取るようにするために、教科書教材に加えて自分が調べた乗り物の中から、お気に入りの乗り物を選び、「のりものずかん」をつくる活動を設定する。  ・第2次の教科書教材を読み取る時間において、並行読書をしている本や図鑑を読む時間を設定する。授業の後半に短時間でも設定することにより、教科書教材で学んだ必要な情報を見つける観点をすぐに自分の図鑑の読みに適用させるようにする。
第3次 (4)	◆好きな乗り物について図鑑で調べ、「のりものずかん」をつくり、読み合う。 <b>挑戦行動</b>  ・好きな乗り物の「しごと」と「つくり」を読み取る。  ・友達と交換して読み合い、感想を書く。	・完成した「のりものずかん」を友達と交換して読み合うことにより、課題が解決したことを実感させるようにする。 <b>有能感</b>

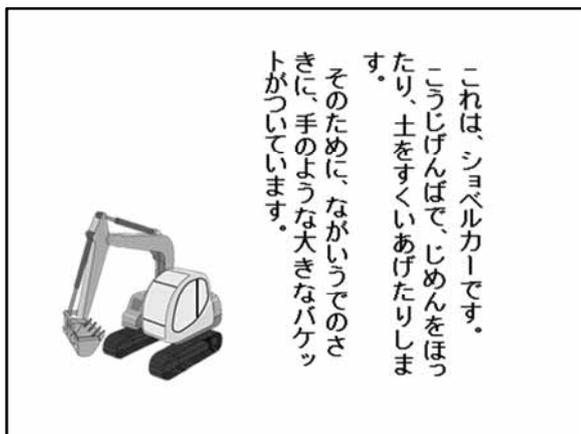
並  
行  
読  
書



## 5 学ぶ意欲の構成要素への働きかけのポイント

## (1) 有能さへの欲求

## ～単元のはじめに、教師が言語活動のモデルを示しましょう～〔第1次〕



これまでも言語活動を位置付けた授業が行われてきました。しかし、第1次では全文を通読し、第2次では教科書教材の内容や構成を段落ごとに平板に読み、第3次に入る際に児童に向けて、「それでは、『のりものずかん』をつくりますよ。」というように、付加的に言語活動を位置付ける単元構成が散見されました。

このような流れであると、児童は見通しをもたずに単元の学習に入り、第2次の教科書教材の学習についても、目的をもたずに受け身的に授業を受けることとなります。そこで、1年生なりに、どんなゴールに向かってどのように学習していくかをイメージさせていく必要があります。

教師が「のりものずかん」のモデルを示すことにより、児童は言語活動の見通しをもつことができるとともに、「これならば、自分にもつくれそうだ。」という気持ちが湧いてきます。それが「もっとできるようにになりたい」といった有能さへの欲求の高まりにつながります。

## (2) 挑戦行動、有能感

## ～図鑑を読むことにチャレンジさせましょう～〔第3次〕

教科書の説明的文章は、事柄の順序が児童にとって分かりやすく整理されて書かれています。一方、図鑑は、児童向けのもものではあっても、それぞれの乗り物の説明内容が多く、構成も教科書教材ほど整理されていません。そのため、第2次で学んだ教科書教材の読み方や観点を、図鑑での読みにうまく生かしていないという状況が少なからずあるようです。

ここで、指導者が、「図鑑を読ませるのは難しいし時間もかかる。」と考え、図鑑を読ませるのをあきらめてしまうのはどうでしょうか。分かりやすい文章ばかり読んでいては、実際に使える読みの力や他教科や実生活で生きて働く力も身に付かないでしょう。

やはり、図鑑の読みに挑戦させることが大切です。もちろん、1年生ということを考慮して、次のような教師の支援が必要になってきます。

## ◆図鑑の準備をしておく

学校図書館担当職員等の協力を得て公共図書館等から借りるなど、児童の実態に応じた図鑑を用意する。苦手な児童のために、比較的情報量が少なく内容も平易な乗り物の絵本なども準備する。

## ◆手助けとなる教師自作の教材を提示する

教科書教材と図鑑を比べると、構成や内容等の難易度に差がある。そこで、その差を埋めるような、構成や文型がやや複雑な教師自作の教材を使い、「しごと」や「つくり」の部分を見付けてまとめさせる活動を行う。このことが、教科書教材と図鑑との橋渡しとなり、図鑑の読みを助けることになる。

## ◆第2次の1単位時間の読みの授業の中で、教師自作の教材や図鑑を読む時間を確保する

児童は成長するにしたがって、第3次の言語活動に生かしていくことを考えながら、第2次の学習に取り組むことができる。しかし、低学年の多くの児童は、その時間に学んだことを長い時間もち続けることが難しい。そこで、短い時間でもよいので、教科書教材の読みの時間の最後に、学んだことを生かして教師自作の教材や図鑑から情報を見付けることを行うことが大切である。

## ◆個への支援を充実させる

適切な図鑑を提供したり、「しごと」が書かれている部分のキーワードや「しごと」と「つくり」の順番について助言したりするなど、その児童の状況に応じたきめ細かい支援を行う。

個に応じた支援をした上で図鑑を読ませる（挑戦行動）ことで、「私も難しい本が読めるんだ。」といった有能感を得ることができます。また、授業後の振り返りも有能感を高める上で効果的です。

1	単元名	戦国時代からどのようにして安定した江戸時代になったのだろう
2	単元の目標	戦国の世から江戸の世へどのように変化したかについての学習問題を見出し、地図や年表などの資料を活用して調べることを通して、戦国の世が統一され、身分制度が確立し、武士による政治が安定したことが分かる。
3	教材	戦国の世から江戸の世へ（東京書籍 6年）

4 主な学習活動  
(1) 単元の展開（全9時間）

	学習活動	指導上の留意点
第1次 (2) 本時	・戦国時代の様子を調べ、どのように全国が統一されたか関心をもち、「だれの、どのような取組によって、争いの多い戦国時代から安定した江戸時代に変化したのか」という学習問題を見出し、学習計画を立てる。	・長篠合戦図屏風絵から、どのような戦いでどのような人物が関わっていたかを考えさせる。 ・信長、秀吉、家康の勢力図や年表を示し、やがて全国が統一され、安定した江戸時代になったことを確認させ、時代を概観させる。
第2次 (3)	・学習計画をもとに、3人の武将の働きと全国統一の関わりについて調べる。	・3人の武将の人物像や働きを比較したり、結びつけたりしながら、グループで調べさせる。
第3次 (3)	・学習計画をもとに、江戸幕府の政治について調べる。	・大名の統制や身分制度の徹底、キリスト教の禁止や鎖国について、江戸時代の安定との関わりで調べさせる。
第4次 (1)	・学習問題について分かったことをまとめる。 <b>深い思考</b> <b>協同学習</b>	・個人で考えたことを、グループ内で交流させることで思考を深めるようにし、最後は個に戻してまとめさせる。

(2) 本時の学習（1～2／9時間）

① 長篠合戦図屏風絵から、戦国時代の戦いの様子について、気付いたことをグループで確認する。 <b>知的好奇心</b> <b>協同学習</b> <b>帰属意識</b> (気付きの例) ・大勢の武士 ・長篠城 ・柵がある ・鉄砲隊 ・騎馬隊 ・武器の違い ・旗
② 織田軍と武田軍の戦い方の違いや信長、秀吉、家康3人の武将の位置から、これからの時代の変化についてグループで話し合い、予想する。 (予想の例) ・「織田軍には鉄砲隊や馬防柵が見られ、武田軍には、刀、やり、騎馬隊が見られる。織田軍の方が強そうだ。3人の武将が同じ織田軍の中にいることから、3人の武将の勢力拡大が予想される。」
③ 3人の武将の勢力図から、その変化を調べ分かったことを発表し合う。 (例) ・どんどん勢力が拡大した。 ・全国が統一された。 ・信長、秀吉、家康の順に広がっていった。
④ 3人の武将の主な年表や江戸時代の主な年表から疑問に思ったことを発表し合い学習問題をつくる。 <b>知的好奇心</b> <b>有能さへの欲求</b> (疑問の例) ・どのようにして260年も続く江戸時代になったのだろう。 ・3人の武将は、全国統一を目指して、どのようなことをしたのだろう。 (学習問題) 「だれの、どのような取組によって、争いの多い戦国時代から安定した江戸時代に変化したのか」
⑤ 予想をもとに学習計画を立てる。 (学習計画の例) ア 3人の武将の働きと全国統一の様子 イ 江戸幕府の政策（家光の政治、参勤交代、身分制度、鎖国など）

## 5 学ぶ意欲の構成要素への働きかけのポイント

### (1) 知的好奇心

#### ～単元のはじめに、児童の興味・関心を高める資料を示しましょう～〔第1次・本時〕

長篠合戦図屏風絵には、織田軍が鉄砲隊を組織して武田軍の騎馬隊を迎え撃つ様子が生き生きと描かれています。その中には、織田側の軍勢として参戦している織田信長、豊臣秀吉、徳川家康が見られます。

多くの児童が知っている3人の有名な武将が、同じ合戦図に描かれていることは、「なぜだろう?」「結果はどうなったのだろうか?」という疑問を生み、**知的好奇心**を高めます。

#### ～単元のはじめに時代を概観させ、時代の変化から疑問をもたせましょう～〔第1次・本時〕

本単元では、第1次に年表を用いて、戦国の世から争いのない安定した江戸時代になったことを概観させ、時代の変化に対する疑問をもたせます。

第1次の冒頭で、長篠合戦の様子から戦国時代の状況を学習した児童は、その後、時代を概観する学習を通して、江戸時代が約260年も続いた安定した時代だったことを知ります。そのため児童は、「どのような経緯で」「だれのどのような取組によって」全国が統一され、争いのない安定した江戸時代になったのかという疑問をもつことになり、**知的好奇心**が高まると考えられます。

### (2) 有能さへの欲求

#### ～単元を貫く学習問題とその追究のための学習計画を立てさせましょう～〔第1次・本時〕

本単元では、第1次に戦国の世から江戸時代までを概観し、そこから出た疑問をもとに、単元を貫く学習問題「だれの、どのような取組によって、争いの多い戦国時代から安定した江戸時代に変化したのか」という問題解決のための学習計画を設定させることで、単元全体の学習に対する見通しをもたせます。

単元を貫く学習問題とその追究のための学習計画を確認することで、児童は「自分にもできそうだ」という前向きな気持ちを持ち、**有能さへの欲求**を高めます。

### (3) 深い思考、協同学習

#### ～友達との考えを比較する場を設定し、様々な見方、考え方に気付かせましょう～〔第4次〕

「だれの、どのような取組によって、争いの多い戦国時代から安定した江戸時代に変化したのか」という単元を貫く学習問題に対する自分の考えをまとめさせるために、自分の意見をもたせた上でグループ内の意見交流を行い、友達の意見に触れさせます。

交流させたり相互評価させたりすることで、児童は新たな視点に気付き、**深い思考**をすることができます。グループ内の交流の後には、再度個人でまとめさせることで、思考の変容を感じさせることもできます。

### (4) 協同学習

#### ～友達と協力して学ぶ場面を設定し、友達に教えたり教わったりさせましょう～

〔第1次・本時〕

長篠合戦図屏風絵から戦国時代の様子や織田、武田両軍の戦い方の違いを考えたり、3人の武将のその後の動きを予想したりする場面では、グループ活動を取り入れます。織田軍の鉄砲隊と馬防柵、武田軍の騎馬隊など戦法の違い以外にも、様々な身分の武士、様々な旗印、長篠城、中央に川が流れている様子など、図屏風絵から読み取れることはたくさんあります。また、図屏風絵の中での信長、秀吉、家康の位置からは、3人の武将の勢力の拡大を予想することができます。

図屏風絵を児童が囲み、気付いたことを教え合うなど、**協同学習**の場を設定することで、協力すれば多くのことに気付くことができるということを実感させるとともに、友達に教えることで集団から認められ、学級への帰属意識が高まり、**学びに向かう集団づくり**につながると考えられます。



1 単元名 物の溶け方		
2 単元の目標		
<ul style="list-style-type: none"> <li>物が水に溶ける量について水の量や温度などの条件を整えて調べたり、溶けた物がどうなったかを図に表したり友達と話し合ったりしながら物が水に溶ける規則性について考えようとする。</li> <li>物が溶けるときの様子を、条件を設定し多様な方法で繰り返し実験したり、集めた実験結果を比べて溶けた物がどうなったか考え、図などを使って友達と話し合ったりして、物が水に溶ける規則性について自分の考えをもつことができる。</li> <li>水の量や温度などの条件を正しく設定したり、計量器具や加熱器具などを安全に使う実験したりして、実験の結果を表やグラフに分かりやすく記録することができる。</li> <li>物が水に溶ける量には限度があること、物が水に溶ける量は水の温度や量、溶ける物によって違うことやこの性質を利用して溶けている物を取り出すことができること、物が水に溶けても、水と物とを合わせた重さは変わらないことが分かる。</li> </ul>		
3 単元 身近な食塩などの物質の溶ける現象と溶けない現象を体験させ、生じた疑問を追究させる。まとめとして、実生活との関わりを意識させるために、パンフレットを作成する活動を設定する。		
4 主な学習活動		
単元の展開（全14時間）		
	<b>学習活動</b>	<b>指導上の留意点</b>
第1次 (4)	<ul style="list-style-type: none"> <li>物が水に溶ける様子をよく見たり、物が水にどこまで溶けるか調べたりして、単元の見通しを立てるとともに、溶けた物の状態を表すモデル図をかく。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>【導入時の実験例】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>食塩が溶ける様子をよく見てみよう。</li> <li>水の温度を変えると溶ける量はどれくらい違うのだろう。</li> <li>決まった水の量に食塩やミョウバンはどれくらい溶けるのだろう。</li> <li>溶かす物の形をよく見よう。</li> </ul> </div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本単元で学ぶことに関する生活経験の不足を補う活動や単元を通して学習する内容を理解するための実験を実際に体験することで、本単元の見通しをもつことができるようにする。</li> </ul> <p style="text-align: right;"><b>知的好奇心</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>物が溶けたときに水の中でどのような状態になっているかモデル図をかくことで、溶けた物がどのような状態になっているか関心を高めるようにする。</li> </ul>
第2次 (1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>前時までの活動を通して、物が溶けるときの疑問に思うことなどを友達同士で話し合い学習問題をつくる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>物が溶けることについて自分の考えと友達のを比べ、学習問題を話し合っている姿を称賛し全体の意欲付けを図る。</li> </ul>
第3次 (6)	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆水の量や水の温度と物が溶ける量の関係、溶けている物を取り出すことができること、物が水に溶けても水と物とを合わせた重さは変わらないことなどを、水の量や温度などの条件を正しく整えたり実験器具を正しく使ったりして調べる。</li> </ul> <p style="text-align: center;"><b>情報収集</b> <b>独立達成</b> <b>深い思考</b></p> <p><u>水の量や水の温度と物が溶ける量の関係について</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ミョウバンなどが水の温度や量を変えたときに溶ける量がどれくらい増えるのか確認する実験</li> </ul> <p><u>溶けている物を取り出すことについて</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ろ過に関する実験</li> <li>蒸発乾固に関する実験</li> </ul> <p><u>物が水に溶けたときの水と物とを合わせた重さについて</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>質量の保存を確かめる実験</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習問題について、水の量や温度、溶かす物などの条件を正しく設定し実験している児童や何度も繰り返しデータを出している児童を称賛し、問題解決の力や科学的なものの見方を身に付けさせる。</li> <li>アルコールランプなどの加熱器具やメスシリンダーなどの計量器具を安全に正しく使用している児童を称賛し、実験器具を安全に使用し正確なデータが取れるようにする。</li> <li>実験のデータなどから物が水に溶けたときの様子を再びモデル図に表して自分の言葉で説明できるように、説明のマニュアルを配布したりじっくりと考える時間を取ったりする。また、最初にかいたモデル図を修正していくよさを伝えていく。</li> </ul>
第4次 (3)	<ul style="list-style-type: none"> <li>第3次の活動でまとめたことを活用して、日常生活との関連させたり友達に見てもらったりすることを目的に「分かったことパンフレット」を作成する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>友達のパンフレットと見比べながら、学習したことと日常生活のつながりに気付いている児童を称賛し、学んだことと生活とのつながりを意識することの大切さを確認する。</li> </ul>

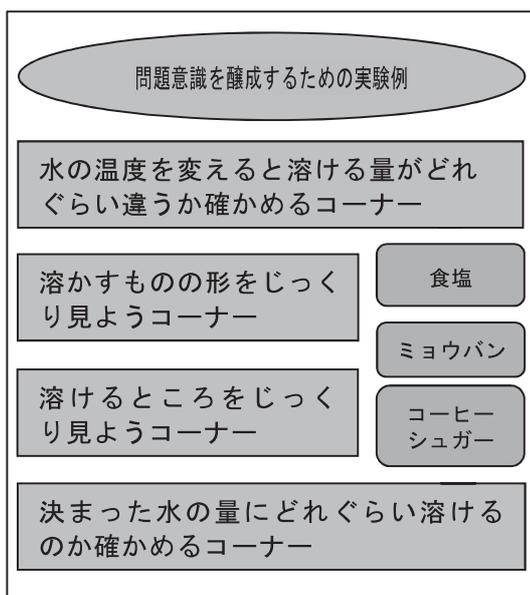
## 5 学ぶ意欲の構成要素への働きかけのポイント

### (1) 知的好奇心、情報収集

#### ～実験の見通しをもたせることで、主体的に学習に取り組ませましょう～〔第1次〕

単元の導入時に、教師が学習する内容を児童に提示することによって単元の見通しをもつことができます。しかし、観察、実験を行う際の「見通しをもつ」とは、「児童が自然に親しむことによって見いだした問題に対して、予想や仮説をもち、それらを基にして観察、実験などの計画や方法を工夫して考えること」です。

本単元では、「物が水に溶ける量には限度があること。」「物が水に溶ける量は水の温度や量、溶ける物によって違うこと。また、この性質を利用して、溶けている物を取り出すことができること。」「物が水に溶けても、水と物とを合わせた重さは変わらないこと。」を分かることが大切です。観察、実験を通して、これらのことを理解させることが重要ですが、見通しをもたせるには、導入時に問題意識を高めるような実験を行うことが大切です。



そこで、単元の導入時に、左の図のような実験を行う時間を設定して、単元で学ぶことの概要を児童に体験させます。そうすることで、児童は問題を見出し、予想や仮説をもち、どんな観察、実験をしなくてはならないかを考えることになります。

よって、児童自らが、「今日の実験に必要な物は…」「この前の実験で分かったことを使うとあと何が分かれば…」という情報を主体的に集めながら、観察、実験に取り組めるようになります。

なお、いくつかのコーナーで自由に体験させる時には、安全面に留意することも大切です。

導入時に問題意識を高めるような実験を行うことで、児童の知的好奇心を高め、実験を行うに当たって必要な情報収集に主体的に取り組むことができます。

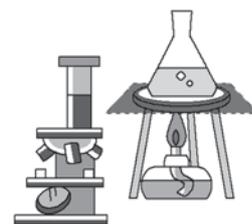
### (2) 独立達成、深い思考

#### ～学んだことや分かったことを児童自身の言葉で書かせましょう～〔第3次〕

ほとんどの児童が、観察、実験で得られた結果をノートに記録することはできません。しかし、考察を的確に書くことについては、多くの児童が苦手意識をもっていると考えられます。

結果とは、観察、実験を通して見られたものそのものです。グループで実験を行ったとき、同じ数値が各児童のノートに記録されます。現象・様子として結果ができれば、見方によって様々に見えるものもあるかもしれませんが、グループで話し合いをすることにより同じような結果が各児童のノートに記録されます。このように結果は同じですが、考察は児童によって異なってきます。

ところで、考察の書き方については、どのように指導しているのでしょうか。「〇〇から分かることを書くのだよ。」「自分の考えを書けばいいのだよ。」という指導をすることもありますが、例えば、「結果を比べてみて、分かったことを書いてみよう。」という投げかけをするのはどうでしょうか。こうした投げかけを受け、複数の結果を結びつける際に思考力を働かせることができます。つまり、**深い思考**につながるわけです。



このように、「予想→観察・実験→結果等」の一連の流れから導かれる「考察」等を、自分の言葉で書かせる活動（**独立達成**）をさせていきましょう。そして、複数の結果を関連付けて考えさせることにより、**深い思考**をさせていきましょう。

1	題材名	音の重なりと反復のおもしろさを感じ取ろう	
2	題材の目標	二つの旋律やリズムの重なりと反復のおもしろさに関心を持ち、互いに聴き合って表現したり、オーケストラの響きを味わって鑑賞したりすることができる。	
3	教材	「アルルの女」第2組曲から ファランドール（ビゼー作曲）、 パレードホッホー（高木あきこ作詞、平吉毅州作曲）、茶色の小びん（ヨセフウィナー作曲） (教育芸術社 4年)	
4	主な学習活動	(1) 題材の展開（全10時間）	
		学習活動	指導上の留意点
第1次 (2)		<ul style="list-style-type: none"> <li>「パレードホッホー」の二つの旋律の特徴を生かして歌う。</li> <li>リズム遊びをする。2小節分の二つのリズムを用いてA→A→B→B→A+B→A+Bで演奏し、リズムの重なりを感じ取る。</li> <li>「パレードホッホー」の二つの旋律を重ねて歌う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>二つの旋律の特徴を捉えさせ、どのように歌いたいかを話し合わせる。</li> <li>全体を2グループに分けて行う。</li> <li>交互に演奏させたり、重ねて演奏させたりすることで、歌唱の活動や第2次の鑑賞、創作の活動との関連を図る。</li> <li>互いの旋律を聴き合って歌唱するように促す。</li> </ul>
第2次 (4)		<ul style="list-style-type: none"> <li>「ファランドール」に合わせて行進したり、手を動かしたりするなど、体を使って表現する。</li> <li>「王の行進」と「馬のダンス」の曲想を比べて言葉で表現する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>二つの旋律の特徴を捉えた表現をしている児童に、その動きにした理由を尋ねる。</li> <li>リズムや音型、調に着目させる。</li> </ul>
本時		<ul style="list-style-type: none"> <li>「パレードホッホー」を歌いながら肩たたきをする。</li> <li>「王の行進」と「馬のダンス」の反復の仕方と、二つの旋律の重なりを聴き取る。</li> <li>各自が2小節のリズムをつくる。</li> <li>友達のリズムと合わせて「ファランドール」と似た構成のリズムの曲をつくる。</li> <li>リズムの曲を発表し合う。</li> <li>「ファランドール」を鑑賞する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>導入時に左右交互に16拍、8拍、4拍、2拍、1拍ずつ肩たたきをしながら歌わせる。</li> <li>二つの旋律が交互に現れ、間隔が短くなることによる高揚感を感じ取らせる。</li> <li>即興的につくらせる。思いつかない児童には、言葉や擬態語をヒントにするよう助言する。</li> <li>違うリズムパターンの二人が組めるとよい。</li> <li>6～8人のグループ内で発表させる。</li> <li>本時はオーケストラの響きを味わって聴くように働きかける。</li> </ul>
第3次 (4)		<ul style="list-style-type: none"> <li>「茶色の小びん」の主旋律を演奏する。</li> <li>グループで四つの声部を分担してアンサンブルをする。</li> <li>コーダを付けて終わり方を工夫する。</li> <li>アンサンブルを発表し合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>主旋律奏は全員が取り組み、その他は、分担した声部を練習させる。</li> <li>音色と音量のバランスに気を付けさせる。</li> <li>どの部分を何回反復して終わりにするかを話し合わせる。</li> </ul>
		(2) 本時の学習（5/10時間）	
		① 各自が2小節のリズムをつくる。	
		二つのリズムで「ファランドール」風の曲をつくらう	
		② 「ファランドール」をヒントに、二人でつくる曲の構成を確かめる。 <b>知的好奇心</b>	
		(例) : A A A A → B B B B → A A → B B → A → B → (A + B) × 4 → コーダ	
		③ 各自がつくったリズムを受け持ち、交互奏、重奏の形で演奏する。 <b>おもしろさ・楽しさ</b> <b>高め合える</b>	
		二つのリズムの組み合わせや、ボディパーカッションの音色を工夫する。	
		④ 通せるようになったら、コーダの部分を考える。	
		⑤ 学習の振り返りをする。	

## 5 学ぶ意欲の構成要素への働きかけのポイント

## (1) 知的好奇心

～著名な作品の構成をヒントにすることで、音楽づくりへの期待感をもたせましょう～

〔第2次・本時〕

中学年の音楽づくりの活動では、音楽づくりのための発想をもち即興的に表現する能力、音を音楽に構成する能力を育てることが指導のねらいとなります。

本題材では、鑑賞曲「ファランドール」との関連を図った音楽づくりを行います。

楽曲の特徴をヒントに、音楽づくりをすることで関心を高められると考えられます。

本時における「音を音楽に構成する」活動とは、反復、変化などの音楽の仕組みを生かして、音楽の終わり方を意識して、まとまりのある音楽をつくるようにする活動です。導入では、各自が短いリズムを即興的につくって友達とつなげることにより曲がつけられるという期待感をもたせることが大切です。

## 「ファランドール」の特徴

- ・旋律A「王の行進」と旋律B「馬のダンス」が交互に現れる
- ・交互奏は加速しながら、間隔が短くなる
- ・二つの旋律が重なる部分がある
- ・華やかなコーダで終わる

## リズムの例



ねらいを達成させるためには、日々の音楽遊びの中でリズム模倣やリズムリレーなどを行っておくこと、学級全体で二つのリズムを重ねて遊ぶ体験をしておくこととよいでしょう。

即興で表現することに苦手意識をもっている児童には、言葉や擬態語を唱えさせて、同じリズムでたたくせると、簡単にリズムをつくることができます。児童が即興的に表現することに慣れている場合には、各自がつくるリズムを4小節に延ばすことも考えられます。

歌劇「カルメン」の作曲者で知られるビゼーの作品「アルルの女から『ファランドール』」の構成をヒントにリズムアンサンブルをつくるという課題を与えることや、短いモチーフから曲ができるという活動への期待感が**知的好奇心**を高めると考えられます。

## (2) おもしろさ・楽しさ

～短いリズムをつなげることで、曲になるおもしろさを体験させましょう～〔第2次・本時〕

本時では、「ファランドール」の構成をヒントに、自分と友達がつくったリズムをつなげるペア活動が中心となります。

例：A A A A → B B B B → A A → B B → A → B → (A + B) × 4 → コーダ

既習の「パレードホッホー」なども参考にさせて、細かいリズムとゆったりとしたリズムを重ねると、おもしろさが生まれることなどに気付かせるとよいでしょう。手拍子を基本とした計画ですが、ボディパーカッションや打楽器を使い、音色を工夫することも考えられます。

ペア学習を基本とし、グループ学習に発展させることができます。一班を6人程度とし、音楽づくりはペアで行い、演奏の際には班で協力して行くと、演奏への安心感もてたり、演奏に迫力が増したりする利点があります。さらに、子どもたちの中から、「ペアを組み替えてやってみたい。」といったアイデアが出ることを期待したいものです。

指導に当たっては、個に応じた支援を適切に行い、自分のリズムができたという実感をもたせること、そして友達のリズムと組み合わせて「曲にすることができた」という成功体験を味わわせることが大切です。作品ができたことや協力できたことに対して十分に称賛するとともに、振り返りの活動で自他のよさに気付かせるなどして、自信をもたせましょう。

次時（第6時）では、アンサンブルを発表した後に「ファランドール」を再び鑑賞することで、児童は一層、楽曲のよさやおもしろさを味わうことができるでしょう。

ペア、グループによる**協同学習**を通して、自分と友達の簡単なモチーフが楽曲らしくなるという成功体験が得られると、結果として**おもしろさ・楽しさ**を実感することが期待できます。また、友達の表現を尊重しながら協力して一つの作品をつくることで、**互いに高め合う**ようになり、**学びに向かう集団づくり**にもつながると考えられます。

1 単元名 式の計算

2 単元の目標

- ・文字を使った式の計算や、それらを活用して問題を解決することに関心を持ち、式の見方を深めようとする。
- ・1年での学習内容から発展的に式の計算を考えたり、文字を使った式で数量および数量の関係を説明したりすることができる。
- ・多項式の加法、減法などの計算ができるとともに、目的に応じて式を活用したり、等式を変形したりして式の意味を読みとることができる。
- ・単項式や多項式などの意味を理解し、文字を使った式を用いて、数量および数量の関係を一般的に説明することの必要性と意味を実感する。

3 教材 身近なものを教材とし、身の回りにも数量の関係が隠れていることに気付かせるとともに、文字を用いて一般的に表現させることで、そのよさを実感させる教材（東京書籍 2年）

4 主な学習活動

(1) 単元の展開（全16時間）

	学習活動	指導上の留意点
第1次 (1)	・数あてゲームを行い、結果があてられるわけを文字を使って考える。 <b>知的好奇心</b>	・数や式などの数学的な表現を使って理由を考えさせたい。
第2次 (8)	・単項式と多項式の意味を知る。 ・多項式の計算をする。 ・単項式の乗法と除法を計算する。 ・式の値を求める。 ・基本の問題を解く。 <b>おもしろさ・楽しさ</b>	・用語の意味を理解させる。 ・既習から、多項式の計算の仕方を類推させる。 ・視覚的な把握をしてから、計算の仕方を考えることへつなげていきたい。 ・直接式に代入するより、式を簡単にしてから代入することのよさを理解させたい。
第3次 (6)	・式による説明をする。（本時） ・等式の変形をする。 ・基本の問題を解く。	・具体的な場面で文字式を活用することを体験させて、文字式の活用の仕方に慣れさせたり、文字式の有用性に気付かせたりしたい。 ・具体的な場面で、数量の表す式を目的に応じて変形しておくことが便利であることに気付かせたい。
第4次 (1)	・前時までに学んだことを振り返り、まとめの問題を解く。	・わからない場合には、既習の学習事項を振り返り、確認させる。

(2) 本時の学習（12/16時間）

【問題1】 カレンダーの  で囲まれた9つの数の和をすばやく求める方法を考えよう。

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

- ① 9つの数の和を簡単に求める方法を考える。**知的好奇心**
- ② 9つの数の和を簡単に求める方法を話し合う。**協同学習 深い思考 帰属意識**
- ③ 全体で話し合い、9つの数の和が（中央の数）×9で求められることをまとめる。**おもしろさ・楽しさ**

$x - 8$	$x - 7$	$x - 6$
$x - 1$	$x$	$x + 1$
$x + 6$	$x + 7$	$x + 8$

- ④ 各自カレンダーを使って類題を作成し、友達と出し合う。**自発学習**

【問題2】 いろいろな形で数を囲み、囲んだ数の和を求める方法を文字を使って表しましょう。



- ⑤ 学習の振り返りをする。

## 5 学ぶ意欲の構成要素への働きかけのポイント

### (1) 知的好奇心

～ふしぎな数あてのしくみを考えることで、文字を使った式の学習への期待感をもたせましょう～

【第1次】

本単元では、第1次の導入時に、生徒が秘密にしている数を教師があてることで、生徒に「なぜ？」という驚きや疑問をもたせたり、感動させたりすることで生徒の課題意識を高めます。

また、本単元の学習を通して、数をあてることができる仕組みを文字を使ってとらえ、数学的に説明できるようになるという学習への期待感をもたせたり、見通しをもたせたりさせます。

単元のはじめに、生徒が身近に感じる魅力ある教材を提示し、これからの学習に対する期待感をもたせ、生徒の**知的好奇心**を高めます。

～カレンダーという身近なものを教材とし、身のまわりにも数量の関係が隠されていることに

気付かせましょう～【第3次・本時】

生徒の興味・関心を引き出し、学習意欲を高めるには、学習と実生活との関連を図ることが大切です。本時では、カレンダーという身近なものを教材とすることで、学習内容と実生活とのかかわりを実感させ、学ぶ意欲をはぐくむとともに、学習内容の確実な定着へとつながっていくことが期待できます。

「こんなところにも数学が…。」、といった身近な教材を取り上げることで、**知的好奇心**を高めます。

### (2) 協同学習、深い思考

～数量や数量の関係を文字を用いて表現し話し合う場を設定し、様々な考え方に気付かせましょう～

【第3次・本時】

本時の学習では、自分で解決方法を考えた上で話し合いをさせ、友達の様々な考え方に触れさせます。

生徒は、互いに学び合う中で、自分の考えを深めることができます。また、よりよく他に伝えるための表現力も育成されます。友達と学び合う中で、自分が一人の人間として大切にされ、頼りにされていることを実感し、存在感を味わうことができます。このことは、**帰属意識**の高い学級づくりにつながります。

**協同学習**を通して、自分とは違う新たな考えに気付いたり、友だちはなぜそのように考えたのだろうと、自分と比べたりすることで**深い思考**へとつながります。

### (3) おもしろさ・楽しさ

～数量や数量の関係を文字で表すよさを実感させましょう～【第2次】【第3次】

本単元では、少し複雑な文字を使った式の計算ができるようにして、文字を使って表現できる関係や法則の範囲を広げることができるようにします。また、文字を使った式が、事象を一般的に考察するための有効な方法の一つになることに気付かせましょう。そして、文字を使った式を活用して数学的に考えていくことのおもしろさやよさに触れさせ、これから数学を学習する上で数学的な推論を進めるきっかけにしていきます。

文字を使った式を用いて、一般的に説明することができるということを理解させることで、**数学的なおもしろさ・楽しさ**を味わうことにつながります。

### (4) 自発学習

～数量の関係について、生徒同士で問題を作って出し合うなどの学習活動を設定しましょう～

【第3次・本時】

本時では、問題解決的な学習を取り入れ、その中で生徒主体の取組や活動場面を設定しています。例えば、各自が問題を作って互いに出し合う活動を行います。これにより、自ら問題を考え、解決していく能力が育成されます。生徒が作成した問題を解き合ったり、問題作りのコツや解いたときの感想を話し合ったりすることで、問題が作られているしくみを理解でき、自ら課題を見出し解決できるようになると考えられます。

こうした問題を作る活動を多く取り入れることにより、今後の授業において、自ら進んで学習に取り組む（**自発学習**）態度につながると考えられます。

- 1 **題材名** 家族の役に立つ小物入れを考えよう（製作品の設計）
- 2 **題材の目標** 収納する小物（使用目的）や使用する場所（使用条件）を明確にし、使用できる材料や製作時間から、使いやすさ及び丈夫さなどを比較・検討した上で、小物入れの寸法と木材の接合方法を決定することができる。
- 3 **題材** 家族の役に立つ小物入れを、家族からの要望やグループのメンバーの意見を聞きながら検討させることで、「技術や生活への関心・意欲・態度」と「工夫し創造する能力」を高めることを目指す題材である。

4 **主な学習活動**

**題材の展開（全3時間）**

	学習活動	指導上の留意点
第1時	<ul style="list-style-type: none"> <li>本時の学習課題を確認する。 家族のために役に立つ小物入れを考えよう。</li> <li>家庭生活を振り返り、家族の役に立つ小物入れの使用目的や使用条件について考える。 <b>向社会的欲求</b></li> <li>小物入れを使いやすくする機能と丈夫にする構造について考える。</li> <li>各自が考えた小物入れがよりよいものになるように付箋を用いてグループ内で検討する。<b>協同学習</b></li> <li>学習を振り返り、家族に提示する設計案をワークシートにまとめる。 課題：小物入れの設計案を持ち帰り、次の点について家族から取材する。                         <ul style="list-style-type: none"> <li>作品の有用性（役に立つかどうか）</li> <li>作品に対する要望や期待など</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生活の中から課題を見つけさせ、収納するものや使用場所について考えさせる。（ここでは、説明文や略図でよい。）</li> <li>見本となる先輩の作品や、見た目優先で使いにくく強度が不足した例を示す。</li> <li>気が付いたことを付箋にメモしながら発表を聞かせる。改善点についての意見は否定の表現を用いずに、「〇〇はどうすればいいか？」という疑問文で書かせ、建設的な話し合いをさせる。</li> <li>グループ内で認められたよいアイデアは、校内特許申請用紙にまとめ提出させる。教師が認定したアイデアは校内特許として掲示し、クラスや学年で共有を図りアイデアの尊重や活用と創造を促すようにさせる。 <b>情報収集</b></li> </ul>
第2時	<ul style="list-style-type: none"> <li>本時の学習課題を確認する。 寄せられた要望をもとに設計案を修正しよう。</li> <li>家族からの要望等をもとに、小物入れの設計案を修正し、具体的な構想図をかく。</li> <li>グループ内での発表や意見交換を通して、班員からの意見や校内特許を参考にしながら、これまで考えてきた案を比較・検討し、製作する小物入れを決定する。<b>協同学習</b></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>思考の経過が分かるように、修正した箇所等を記入する欄を設け、記録させる。</li> <li>様々な要望や改良のための視点があることに気付かせることや、校内特許を活用させることにより、技術を評価・活用する能力や態度を身に付けさせる。</li> </ul>
第3時	<ul style="list-style-type: none"> <li>本時の学習課題を確認する 小物入れの形状や寸法を決定しよう。</li> <li>収納する小物の寸法や材料の寸法から、作品全体の寸法や形状を考えながら、木取り第1案をかく。</li> <li>材料の余りを出さないことや部品点数等の制約条件も考えて、第2案～第3案をかく。</li> <li>小物入れの形状と寸法を決定する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>木取り第1案がかけたら、教師に見せるように指示し、教師が個別に指導する。</li> <li>制約条件は、生徒の学習状況によって、段階的に示すようにする。<b>挑戦行動</b></li> <li>部品の接合方法も確認させる。</li> </ul>

## 5 学ぶ意欲の構成要素への働きかけのポイント

## (1) 向社会的欲求、充実感、有能感

～家族のために、家族の役に立つ小物入れを考えさせましょう～〔第1時、事後〕

昨今の中学生は、あまり不便を感じずに生活してきており、工夫やものづくりによって生活を改善した経験も少ないのが現状です。その中学生には、自分の生活を改善するための自分専用の収納製品を考えさせることで製作の意欲は増しますが、家族などの所属する集団や他者のためのものづくりに取り組みせることは、社会や集団の一員として持続可能社会の構築に貢献しようとする態度や、教科のねらいである「技術や生活への関心・意欲・態度」を高めるなど、様々な教育的な効果が期待できます。

家族への取材から得た要望や期待に応える小物入れを考えさせることは、生徒が「自分も家族の一員として役に立ちたい」と感じる**向社会的欲求**を高めることにつながります。

本題材で考えた作品を製作した後、自己評価によって学習を振り返るほかに、家族からの評価（感謝の言葉）を書いてもらうことで、生徒自身の「家族の役に立った」「なかなか自分もやるなあ」といった**充実感**や**有能感**を高めることが大いに期待できます。



## (2) 情報収集

～アイデアを尊重し共有することで、より良いアイデアを考えさせましょう～〔第1時～〕

生徒が考えた優れたアイデアは、教師が「校内特許」として認定し、教室内に掲示し共有します。これを参考にさせることで、より良いアイデアを生み出そうとする意欲や態度を高めることにつながります。アイデアが浮かばない生徒も、「校内特許」を参考にできるので、安心して学習に取り組むことができます。

優れたアイデアをクラスや学年で共有する「校内特許」の活用によって「使いやすくなるための参考となるアイデアはないか」、「これよりもっと丈夫な作品にしよう」など、生徒が主体的に**情報収集**を行うことにつながり、学習がより探究的になっていきます。



## (3) 協同学習

～家族への取材やグループ内での意見交換を通して、改善点を考えさせましょう～〔第1～2時〕

図や表をかくことによって考えを整理させたり、先輩の作品の良さや工夫点の見取りを記録させたりすることは、教科特有の「言語活動」であり、主に「工夫し創造する能力」を育成する指導において活用されます。その中でも、「話し合い活動」により学習効果を高めるためには、「話し合いの方法やきまり」について事前に指導しておくことや、話し合う際の台本の例をワークシートに掲載するなどの準備と工夫が大切になります。

本題材では、家族からの要望を聞く「取材活動」や、グループの中で自分のアイデアを発表したり、グループのメンバーのアイデアを聞いたりする「話し合い活動」等の**協同学習**を行うことが、自分の作品（アイデア）をより良く改善していこうとする意欲を高め、工夫し創造する能力の育成につながります。

また、**協同学習**を行う上で、友達の良い考えや長所に気付けるように教師がサポートすることは、困ったときには相談したり、手伝い等を頼んだりしやすい**安心して学べる環境**づくりにつながります。

## (4) 挑戦行動

～制約条件を生徒の実態に応じて与え、少し難しい課題に挑戦させましょう～〔第3時〕

家族の立場になって、生活に役立つ製品を考えさせることは、やや難易度の高い学習課題です。更に、「使用する材料の余りは、まったく出さない（できるだけ出さない、1/3くらいまで…）」や、生徒の学習状況や技能等の実態に応じて、「製作時間の関係で、部品数は7（6、5…）個まで」など、制約条件を段階的に示すことで、難易度を調整しながら課題に挑戦させることができます。



家族の要望を作品に生かすことや作品製作上の制約条件等を段階的に示すことで、生徒は「それならできそうだ。」という見通しをもち、「もっと使いやすくしよう。」などの少し難しい課題にも挑戦しようとする**挑戦行動**につながります。



1 単元名 Let's Read 2 「Roy Brown - Boy Detective」		
2 単元の目標		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・物語を読んで、そのあらすじや内容の大切な部分を正確に読み取る。</li> <li>・物語の内容が聞き手に伝わるように登場人物の心情などに応じた適切な音読をする。</li> </ul>		
3 教材 文章としてある程度の長さを持ち、まとまった内容を伝えようとする読解教材である。音読やロールプレイなどを通して大意を捉えさせるとともに、物語の読みを深めさせる。（東京書籍 3年）		
4 主な学習活動		
単元の展開（全6時間）		
	<b>学習活動</b>	<b>指導上の留意点</b>
第1次 (1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・物語を読み、話のあらすじをおさえる。</li> <li>・物語を読み、各自の感想を伝え合う。</li> </ul> <p style="text-align: right;">協同学習 高め合える</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒と十分なインタラクションを行いながら物語を導入する。知的好奇心</li> <li>・文章全体ではどのようなことが書かれているのか意識させて読み始めさせる。</li> <li>・初見でわかった内容や疑問点についてペアやグループで話し合わせ、次時からの読み取りへの意欲を更に喚起させる。</li> </ul>
第2次 (4)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各パートを読み、内容を理解する。深い思考</li> <li>・登場人物の気持ちや物語全体の流れを考えながら音読する。</li> <li>・ロイ、タイロン、ブラウン署長、クレイン氏、ホルト氏等、登場人物になってロールプレイングを行う。協同学習 高め合える</li> <li>・物語の続きを考えて発表する。深い思考</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本文から読み取る発問と本文を手がかりとして考える発問の両方をワークシートに盛り込む。</li> <li>・音読の際に、新出語や発音が難しい語については、十分に練習を行う。読めない語については、個別に支援する。</li> <li>・ロールプレイングをする際に、教科書の表現と少し違ったり、単語だけになったりしてもよいことを伝える。</li> <li>・活動の様子を見ながら、ペアやグループでの取組に対して支援する。</li> <li>・外国語活動でロールプレイングを行った生徒には、その時の経験を思い出させながら取り組ませる。</li> <li>・様々な意見を認め合う雰囲気づくりを行う。そのように考えた理由は何なのかを意識させながら発表させる。</li> </ul>
第3次 (1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時までに学んだことを振り返る。</li> <li>・教科書以外の英文を読み、物語の概要や物語に対しての感想や意見等を互いに伝え合う。</li> <li>・学習の振り返りをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・物語の大筋を捉え直しながら、前時までの学習を振り返らせる。</li> <li>・生徒の実態に合わせたワークシートを準備し、英文を読んだり感想等を伝え合ったりする際に活用させる。</li> <li>・ワークシートには、必ず全員答えてほしい発問と、できればチャレンジしてほしい発問の両方を用意する。</li> </ul>

## 5 学ぶ意欲の構成要素への働きかけのポイント

### (1) 知的好奇心

～英文を読み始める際、生徒とのインタラクションを通して活動意欲を高めましょう～

物語等のまとまりのある英文を読む際、教師からの一方的な口頭での導入だけではなく、生徒とのインタラクションを通した導入を行うことが大切です。右のような教師とのやりとりをきっかけとして、生徒が「どんなことが書かれているのだろう」、「早く読んで知りたいな」と思うような学ぶ意欲につながるやりとりをします。

また、その発問を受けて、一文一文を区切って理解するのではなく、文章全体ではどのようなことが書かれているのかを生徒が主体的に読もうとすることにもつながります。



【第1次】

英文を読み始めさせる前に大切なことは、本文の内容で書かれている事実に触れるのではなく、事実は読み進める中で生徒が徐々に理解するものとし、インタラクションを通して生徒が思わず読みたいと思うような**知的好奇心**をくすぐるきっかけづくりを行うことです。



### (2) 深い思考

～物語に関連する発問を通して生徒の読みを深めさせましょう～ 【第2次】

書かれている内容から答えを推測させるような発問をすることで、生徒は本文を繰り返し主体的に読むようになります。例えば、「犯行現場からタイロンの家まではどのくらいの距離があるでしょう。」、「ロイは、父にどんな計画を話したのでしょうか。」等の発問から、生徒が物語の細部と全体を必然的に読むことにつながります。

また、生徒に自由な発想で物語の続きを考えさせて発表させたり、自分がもし登場人物の誰かであったらどのような行動をとるか等を、自身の体験や知識などに照らして書かせたりします。こうした活動をすることで、文章全体の内容を考え、深く読むことにつながります。



物語の指導では、まず大まかな流れや書かれていることを読み取らせることが大切です。しかし、時には、書かれている内容を理解させるだけでなく、本文の内容を基に想像を膨らませながら読み取らせることも必要です。このことを理由も含めて表現させることで**深い思考**につながります。

### (3) 協同学習

～学習活動に合わせペア学習やグループ学習を効果的に取り入れましょう～ 【第1次～2次】

第1次では、物語のあらすじを捉えさせるときペアで話し合う時間を確保します。ペアで確認を行う前には、個で考える時間を確保します。その際、例えば主人公ロイが各場面で事件とどのようなかかわりがあるか等、考えていく上での視点を与えます。互いの意見交換を通して物語への理解を深めさせます。また、第2次での音読の場面では、個でしっかりと練習を行い、ペアで読み合う活動が考えられます。順番に英文を読み合うことで、互いに助け合う姿も期待できます。最後にグループで役割を分担して読む活動を行います。事前にペアやグループごとに全体で発表することを予告することで、聞き手がいるという相手意識をもって活動に取り組むことにつながります。

ペアやグループ等での学び合いや教え合いによる**協同学習**を通して、授業のねらいである指導内容の理解や習得につながります。また、一緒に活動する中で、自分の役割を果たしたり、助け合ったりすることで、互いの存在を認め合い**高め合える**ことができ、よりよい関係や望ましい集団を形成することにもつながります。



### ここに注目！③

#### 振り返る活動

児童生徒自身による振り返り（自己評価）では、授業の冒頭に目標をもたせること、学習状況を授業の最後に振り返らせることの大切さが、広く知られています。教師によるよい面への評価に加えて振り返りをさせることは、「有能感」を育てることにつながります。

また、この振り返りと、授業の冒頭に目標（めあて・ねらい）を示す活動を積極的に行った学校ほど、全国学力・学習状況調査の国語B（活用）の記述式問題の平均正答率が高い傾向があることが示されました。（「平成 25 年度全国学力・学習状況調査 クロス集計報告書」平成 25 年 12 月 国立教育政策研究所）

一方、上記の調査から、「学校が上記の活動を行っていると考えていても、そのように受け取っていない児童生徒が一定割合存在し、特に中学校ではその割合が大きい」ことも分かりました。近年、「本時のねらい」の提示は定着してきていますが、一部では、目標の提示や振り返る活動を行っていることが児童生徒に伝わっていないことがうかがえます。今後は、目標を明確に提示すること、自己評価を工夫して実施することに、より一層努めていくことが大切です。



### ここに注目！④

#### 授業の中で行う「学びに向かう集団づくり」(2)

児童生徒の学ぶ意欲を高める上で重要なポイントが、安心して学べる環境をつくることです。調査研究「学ぶ意欲をはぐくむ」では、安心して学べる環境づくりを進めていく上での四つのポイントを示しました。

##### 安心して学べる環境づくりのポイント（人的環境）

- 1 子どもの視点に立ち、子どもを肯定的にみる
- 2 子どもの意思を尊重し、自発性を育てる
- 3 意図的に働きかけて、一人一人の子どもを生かす
- 4 学び続ける姿を通して、学ぶ意義を伝える

これらのポイントを意識した取組は、大部分が授業の中で行う取組と言えます。

例えば、ポイント1の取組です。教師が児童生徒の発言等を肯定的・受容的に受け止めることにより、教師への信頼感が高まります。すると、心が落ち着き学級での居心地がよくなります。

また、ポイント3で示すように、授業中の学び合いの場で、教師が意図的に一人一人の子どもを生かす働きかけをすることにより、集団の中で個性を発揮したり活動が活性化したりします。

このように、授業で行う安心して学べる環境づくりは、帰属意識の高い学級や互いに高め合える集団をつくることになり、学びに向かう集団づくりに結びつくと考えられます。